

終末を恐れず 主に信頼して生きる

ルカによる福音書21章5～19節

2024年3月10日

松田 基子 師

教会の暦では、今、受難節を過ごしています。イエス様は神の子の位を捨てて、人の最も低きに生まれて来てくださいました。共に飢え渴き、疲れ、人々の蔑み、また、批判など、生きる悩み、苦しみをその身に味わい、人間に対する罪の誘惑の多さ、その大きさを知ってくださいました。神様の御心を語り伝えて3年有余、そして遂に罪の無い神の御子の身体に、全人類の罪を負って、身代わりの十字架に架かれる時が迫っていました。イエス様はこの時、十字架を決意して、エルサレムに上ってこられました。

時はちょうど過越祭が行われる時でした。エルサレム神殿には、国内ばかりか、地中海世界に、離散しているユダヤ人達が過越祭を祝う為にエルサレムの神殿に巡礼に来ておりました。神殿は大勢の人で賑わっていました。何しろ神殿はそれまで四十数年を懸けて改装に改装を重ねて、豪華さ壮麗さを誇る建物となっていました。人々はその壮麗さに惹かれていましたから、神殿巡礼が楽しみの時でもありました。

さて、ルカによる福音書21章5節を見ますと、「ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた、

『あなたがたはこれらの物に見とれて
いるが、一つの石も崩されずに他の
石の上に残ることのない日が来る』
と記されています。

ここである人と言うのは、他の福音書では、弟子だと記されていて、また、この後のやり取りからも、イエス様が弟子に言われた言葉である事が分かります。石の豊富なイスラエルに於いては、大きなものは、長さ9メートルにも及ぶ石が使われていた事が、神殿の西の壁の遺跡からも分かっています。その様な石で築かれていた堅固な神殿です。また、弟子たちにとって、全てのユダヤ人にとって、神殿は神様によって守られている所であり、

『この神殿が崩壊するなどと言う事は、
神様がこの世界を終結される、世の終わりの
時以外、起こりえる筈がない』
と考えられていました。ですからイエス様の言葉
に驚きました。弟子たちは、

『そんな事が起こったら大変な事になる』
と不安を感じました。そこで彼らはイエス様に尋
ねたのです。

「先生、では、そのことはいつ起こるの
ですか。また、そのことが起こるとき
には、どんな徴(しるし)があるのですか。」
弟子達にとって、それは真剣な問いでした。

当時イスラエルは、ローマ帝国の支配下にあり
ました。民衆はローマへの税と、また、ユダヤを
治める領主が課す税の二重の税に苦しんでいま
した。生活の厳しさは、メシアを期待しました。
民衆はイエス様にメシアを期待しました。イエス
様こそ、真のメシアでした。それは人類を永遠の
罪の滅びから救出す、人間の存在の全てを救い
出す、真のメシアでした。でも、
民衆にも、弟子たちにも、その真の価値は分か
りませんでした。彼らが求めていたメシアは、今、
見えるこの世界の厳しい生活から解放して、楽に
暮らせるようにしてくれる、人生の安逸を与えて
くれるメシアでした。

弟子たちもまた、イエス様をその様なメシアだ
と
思っていました。イエス様はその様に力を発揮さ
れるに違いないと
思っていました。弟子たちは、それが何時なのか。また、その前兆を知りたくて
たまりません。そんな弟子たちに対して、イエス
様は8節で、

「惑わされないように気をつけなさい」
と、命じられました。何に惑われない様にと
言う
のでしょうか。私の名、つまりイエス様こそ、真の
メシアですが、メシアの名を名乗る者が、大勢現
れ、

「わたしこそメシアだ」
と、名乗り出て、
「さあ、神の国が打ち立てられる。神の時だ」
と言って人々を煽動するのです。きっと大勢の
人々が付いて行くでしょう。

「しかし、あなた方は付いて行ってはならない」
と
言われました。

133年にバル・コクバはメシアの名を得て、革命を起こしましたが、2年後にローマに敗れてしまいました。神がかった人間離れした者が現れたとしても、人間は何処までも人間であり、同じ様に死せる存在です。人間をメシアとしてはならない、人間に頼ってはならないのです。

しかし、イスラエルには、

『人の子として現れるメシア』
の考えがあり、偽メシアが現れる素地がありました。そしてこの世には、

『終わりが来る、終末を迎える』
と言う考えがありました。また、その前に、
世界は、

『大混乱に陥る』
と、考えられていました。

その事に対しても、イエス様は注意をお与えになりました。9節に、

「戦争とか暴動の事を聞いても、怯えてはならない。こう言う事がまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである」

と、言われました。

世の終わりと言う言葉を聞くと、何か、人類滅亡の日の様に思われますが、聖書が教える終末は、そう言うものではありません。天地創造の初め、神様は天地万物を、そして、人間を、

「はなはだ良きもの」
として、創造し、それを時間の中に置かれました。時間とは、初めがあり、終わりがあるものです。

『物質は時間と共に古びて行きます』
神様は創造された世界を、麗しく成長させる為に、その管理を人間に託されました。それなのに、人類は神様からの預かり物を私物化し、奪い合う歴史を綴って来ました。その結果が、戦争、暴動と言った、民は民に、国は国に敵対して、立ち上がり、それはイエス様の時代以前から今日まで、人類の歴史に繰り返されてきました。人間の地球に対する搾取は、自然災害を引き起こし、環境破壊は続き、災害は甚大化しています。人間同志の力に依る搾取は、飢饉や疫病を起こす誘因になっています。様々な要因が重なって、地震など、天変地異が起きます。

こう言うことが起これば、誰でも今にも、

『天地は滅び去る』
のではないかと、怯えて当然です。でも、イエス様は言われました。

「怯えてはならない。こう言うことが先ず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである」と。

イエス様は弟子たちの、
「何時起こるのですか。

どんな徴があるのですか」
との問いに対して、お答えにならないで

「惑わされてはならない。
如何なる事が起きようとも、
怯えてはならない」

と、お命じになりました。

何故でしょうか。それは、世界も歴史も、
『神様の御手に握られている』

からです。イエス様は、十字架の死の彼方に、復活、昇天、再臨を見据えておられました。ヘブライ人への手紙9章27節から次の様に記されています。

「人間は唯一度死ぬことと、その後に裁きを受ける事が定まっているように、キリストも、多くの人の罪を負うために、唯一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです」とあります。

イエス様はこの世界を終結する為に、再臨されるのですが、それは確かに、この世界を裁かれるためです。唯そこでイエス・キリストの御救いを信じ、キリストに寄り縋る(すが)者に対して、イエス様は、ご自身が十字架に架かって得られた、贖いの義の衣を着せて、裁きの座に立たせてくださるのです。イエス・キリストの再臨は、キリスト者を神様の裁きから、文字通り救い、新しいイエス・キリストによる完全な支配、神の国が始まる為のものなのです。それは、キリスト者にとって、

『待望の時、喜びの時』
なのです。ですから、キリスト者は、世の中で何が起ころうとも、神様に信頼して、怯えてはならないのです。

ところがイエス様は、私達がまた、また怯える様

な事を言われました。12節に、
「しかし、これらの事が全て起こる前に、
人々はあなた方に、手を下して迫害し、
会堂や、牢に引き渡し、私の名のために、
王や総督の前に、引っ張って行く」

と言われました。何故その様な事を神様は許されるのでしょうか。私達は神様の愛の御心を良く考え、

『神は愛なり』
をどんな時も忘れてはなりません。

そこで、大事な事は、
『神様の愛は、私達キリスト者だけに
注がれているわけではありません。』
全ての人に注がれています。テモテ第Iの
手紙、2章4節に、

「神は、全ての人々が救われて、真理を
知るようになる事を望んでおられます」
と記されています。心頑なな人間は、通り一遍
の説明で、心が変えられる事はありません。
初代教会で、最も多くの人に、王や総督の前でも
イエス・キリストを証しした使徒パウロは、
ステファノの殉教を目の当たりにして、彼が迫害
の直中で、天使の様な顔をして殉教していった姿
に、心射されていました。

『一人でも多くの人を救いたい』
と、願っておられるイエス様は、
「それはあなた方にとって証しをする
機会となる」

と言われました。そこはイエス様が遣わされる所
なのです。遣わされるからには、イエス様は共に
いて、全存在を守り抜いてくださいます。

14節に、
「だから、前もって弁明の準備をするまいと、
心に決めなさい。どんな反対者でも、
対抗も反論も出来ないような言葉と
知恵を、私があなたがたに授けるから
である」

と、約束して下さいました。イエス様の十字架、
復活、昇天後に、弟子たちはその真理を悟り、
イエス・キリストによる救いの福音を語りました。し
かし、人の心は頑なで、多くの人には信じません。
そればかりか、親・兄弟・親族・友人にまで裏切ら
れる、中には殺される者も出て来ました。
イエス様は、はっきりと云われました。

「私の名のために、あなた方は
全ての人に憎まれる。」

イエス・キリスト信仰に、良いとこ取りはありません。
罪の支配する、この世の勢力に付くか、イエス・キ
リストに付くか、どちらかなのです。聖霊に依っ
て自分の罪深さを知り、その罪をイエス様が全て
十字架に負って苦しんでくださった。その愛がど
れ程、自分の胸に迫って来るか、その愛を受け止
めているかです。イエス様の愛に答えたいとの
思いから、迫害する者の為にも祈り、証しをしてい
く力が与えられて来るのです。

日本のキリスト教史に、キリシタン弾圧の歴史が
あります。

「それ故に今日でも、キリスト教にこそ、真の
救いがあると思っけていても、信仰に飛び
込めない」

と言う事を聞きます。誰も迫害に対しては、恐れ
怯えて当然です。しかし、イエス様は、その事
に対して、

「怯えてはならない」

と言われます。彼らはあの弾圧の中で、怯える
心を天に向けた時、イエス様の愛が、彼らの心に
溢れました。彼らはあの、ステファノの殉教の様
に、イエス様の愛を証しする事で、心はいっぱい
になったのでした。

豊臣秀吉は、ポルトガル、スペインとの貿易の
ために、当初、宣教師達のキリスト教布教に対し
て寛大に接していましたが、1587年宣教師達の
教えが、日本の宗教を惑わし、政治体制を脅か
すのではないかと危惧して、バテレン追放令を出
しました。しかし、それは徹底的なものではあり
ませんでした。ところが1596年、スペイン船サン
フェリペ号が土佐に漂着しました。

一説に依りますと、この船の高価な積荷を、
日本は全て没収した事から、そこで始まった
いざこざに、船員は腹を立て、

「宣教師の布教を足掛かりに、征服するのだ」と
言ったそうです。

その事から秀吉は宣教師に、危険を感じ、
京阪地方にいた宣教師6名と日本人信徒20名を
捕らえて、長崎で処刑する事を命じました。
26人は1597年1月初めに、京都を出発し、
約900kmの道を、先ず下関まで歩きました。

途中三原では、14歳の少年、聖トマス小崎が、家族への手紙を書いたとの逸話があり、現在、三原城址には、トマス小崎少年像が立てられているそうです。殉教者達を護送する役人の長は、14歳の少年に棄教を勧め、

「棄教さえすれば、自由になれるのだ」と、説得を重ねたそうです。しかし、トマス小崎少年は、

「その様な条件であるなら、天国へ行く方が良い」

と答えて、信仰を捨てなかったそうです。他に13歳の、聖アントニオ、12歳のルドビコ・茨城も少年ながら最後まで信仰を捨てず、寒さの中、凍える足で一月余りを歩きました。

下関から九州小倉へ船で渡ると、再び長崎への道を歩き2月5日、西坂の丘に、辿り着きました。そこには26本の十字架が立てられていました。一人ひとり、その十字架に縛り付けられました。彼らはそこで賛美歌を歌い、祈りを献げました。

その中で、三木パウロは、十字架に縛られた儘で、顔を群衆の方に向けて、語り掛けました。「見物の方々、私の末期の言葉を、心を聞いて下さい。今ここに十字架に架けられたのは、世の救い主、イエズス・キリストの教えを述べ伝えたからであります。けれども、この苦しみは、大いなる天主から頂いたもので、私の無上の喜びであります。見物の方々よ、私は今、絶えようとする私の命に賭けて断言します。この真の神、天主の御教えの他に、永遠の命に至る道はありません。私達がここで何ら罪が無いのに十字架に架かるとしても、命を奪う人々に対して少しの恨みの心を抱く事はありません。唯あなた方及び、我が日本の国民が悉く(ことごと)、この同じ救いの道に入る様、直すら願うだけです」と語り掛けたそうです。

三木パウロは、道中同じ様に、見物人達に、語り続けて来たそうです。西坂の丘記念館に行きますと、三木パウロが、十字架の上から、最後まで語り続けた姿が、木彫りにされているのを見る事が出来ます。私はその時の感動を忘れる事が出来ません。ところで、イエス様は、ご自身を信じる者に対して、

「あなた方の髪の毛の一本も、決して

無くならない」と、

約束して下さいましたが、この事は、地上の死せる肉体の事ではなく、永遠の命の保証をお与えになった言葉です。私達が得るべき究極のものは、**永遠の命**です。そこでイエス様は、

「**忍耐によって、あなた方は命を勝ち取りなさい**」

と言われました。26聖人こそ、忍耐に依って永遠の命を勝ち取った聖徒たちです。彼らの殉教によって、またそれに続く、キリシタンの殉教によって、私達は今、**イエス・キリストの真の救いを、迫害を受けずに得ています**。彼らの主イエス・キリストに対する、篤き愛に比べ、主への愛の足りなさ、信仰の生ぬるさ、宣教心の鈍さを恥じるばかりです。

受難節のこの時、イエス様への十字架の愛に、心迫り、聖霊に依って、イエス様への愛を燃え立たせて頂きましょう。この後、どの様な苦難の時代が来ようとも、主イエス様に信頼して、この世界を恐れず、一人でも多くの人が救われる事を求めて、それぞれに示されるに、イエス・キリストの御救いを、語り伝えて参りましょう。

お祈りを致します。

愛と憐れみに満ちておられる天の父なる神様
受難節のこの時、イエス様の十字架による贖いの愛に、心迫る者として下さい。迫害を受けながらも、この御救いを証ししてくれた殉教者達に感謝します。

彼らを御国で愈々(いよいよ)輝かせて下さい。私達も如何なる時も、私達の全存在を保証し、永遠の命を与えて下さる主イエス・キリストに信頼し、従い行くものとならせて下さい。

弱い私達を助け導き、命の道を最後まで歩み通す者とならせて下さい。

救い主イエス・キリストのお名前によって
お祈りをいたします。

アーメン。